

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 元 年 6 月 13 日現在

機関番号：22101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13473

研究課題名（和文）複合語と句の間に見られる共通点と相違点 分散形態論の立場から

研究課題名（英文）The similarities and differences between compounds and phrases -In terms of Distributed Morphology-

研究代表者

大久保 龍寛 (Okubo, Tatsuhiro)

茨城県立医療大学・保健医療学部・嘱託助手

研究者番号：80781377

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）：語は句と同様に統語部門で形成されるという分散形態論の仮説を採用し、両要素の特徴を併せ持つ表現の記述・説明を行った。特に、記述属格と名詞で構成される複合表現（例：women's magazine）を対象とし、それが示す句のふるまいおよび語のふるまいをリストした後、それぞれに対し分散形態論の見地から説明を与えていった。結論として、当該表現が示す句のふるまいのみならず語のふるまいに関しても統語部門で用いられる要素・操作のみで説明することが可能であるとわかった。本研究により分散形態論の仮説がより一層強固なものになったといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外問わず分散形態論における複合語研究は隆盛を極めているとは言い難い状況にある。Truck driver のような統語部門の関与がうかがえる表現以外では分析の手がかりとなるものを見つけることが困難であるからである。本研究では、分散形態論の枠組みに基づき、これまで複合語の特徴とされてきたものを、句形成に用いられる要素および操作のみで説明可能であることを示した点において、分散形態論における複合語研究の現状に一石を投じるものとなったといえる。

研究成果の概要（英文）：Adopting the hypothesis of Distributed Morphology that syntax is responsible for word building as well as phrase building, this study describes and explains a hybrid of word and phrasal properties. A particular focus is put on complex expressions composed of descriptive genitives and nouns (e.g. women's magazine). After their word and phrasal properties are listed, the properties are explained in terms of Distributed Morphology. As a result, the word properties can be explained only by syntactic elements and operations, which strongly supports the hypothesis of Distributed Morphology.

研究分野：統語論・形態論

キーワード：分散形態論 複合語 「記述属格＋名詞」形 対照焦点

1. 研究開始当初の背景

生成文法では Chomsky (1995) 以来、言語体系の構築はできるだけ最少の道具立てで行われるべきであるという研究プログラムに従って研究が進められてきた。このプログラムの下では、Chomsky (1970) 以来、語の構造形成のためだけに設けられてきた形態部門の存在そのものが議論の対象となる。構造形成には統語部門という独立して必要な部門が既に存在し、その部門で語形成が行えるのであれば、形態部門の存在は不必要となるからである。このような信念の下に成立した枠組みが分散形態論である (Halle and Marantz (1993, 1994), Marantz (1997), Embick and Marantz (2008), など)。これまで分散形態論では、語には意味・形態において比較的生産性の高いものとそうでないものがあるという事実に着目した研究が行われてきた。一例を挙げると、接尾辞間に見られる生産性の差を統語構造の違いに還元する、といったものがある (例: *-ity* 派生語 vs. *-ness* 派生語 (Embick and Marantz (2008)))。しかし、これまでの研究は、どれも派生語や屈折語のような語彙性の高いものであり、複合語に関しては等閑視されてきた。複合語は二つ以上の語 (あるいは語彙素) が結合された形式であり、形の上で句と似通ったものである (例: *blackboard* 「黒板」 vs. *black board* 「黒い板」)。さらに、生産性に関しても、複合語は句と同様に生産性が非常に高い。例えば、英語の複合語の一種である「名詞 + 名詞」形などは、即自的に作ることが可能な表現である。以上の事実を踏まえると、複合語は、句と同様の生成過程を経ていると考えることができるので、分散形態論にとって都合の良い研究対象であるはずである。

2. 研究の目的

これまで複合語と句を区別するために様々な基準が提案されてきた。良く引き合いに出されるものに「統語操作が対象となる表現の一部に適用可能であるか否か」というものがある。例えば、名詞で構成される複合語の場合、その一部だけを形容詞で修飾することは許されない (例: 古本市 vs. **[古い本]市*)。このような基準に加えて、島村 (2014) は「複合語は別の複合語の主要部として機能することが可能である一方、句にはそのような機能が認められない」という新たな基準を提案している (例: *[small car] driver* vs. **sport(s) [small car]*)。以上二つの基準にしたがうと、かなりの程度で複合語と句をきれいに区別することが可能であるが、中には両方の性質を示すため簡単に区別することができないような表現も存在する。その一例として「記述属格 + 名詞」形 (例: *woman's hat*) が挙げられる。この表現は、形容詞による主要部の修飾を許す点で句のふるまいを示す一方 (例: *women's [glossy magazine]*)、当該表現全体が主要部として機能できる点で複合語のふるまいを示す (例: *an airport [men's room]*)。このような中間事例の存在は複合語形成、特に複合語の構造形成、を形態部門のような統語部門とは独立した部門で行う理論では非常に捉えにくいものである。一方で、分散形態論では語も句も統語部門でそれぞれの構造が形成されることになるため、両方の特性を兼ね備えた表現が存在することはむしろ自然なことである。このような問題意識の下、本研究は、語と句の両特性を兼ね備えた表現を分散形態論の枠組みから説明することを目的として開始された。

3. 研究の方法

本研究の肝となるのは複合語および句の特性を示すような表現の存在である。したがって、まずはそのような表現の存在を確認せねばならない。幸いにして島村 (2014) をはじめとした様々な先行文献において当該特性を有する要素の存在が確認されている。その中でも本研究において特に着目したのは「研究の目的」でも言及した「記述属格 + 名詞」形である。当該表現について、その句のふるまいおよび語のふるまいを洗い出し、それぞれのふるまいについて分散形態論の見地から説明を与えていった。

まず「記述属格 + 名詞」形が示す句のふるまいから見ていきたい。当該表現は「研究の目的」で確認した句の特徴 (形容詞による主要部の修飾) に加え、構成要素の一部が削除可能であるという句の特徴も示す。(1) の句の事例のように、(2) で「記述属格 + 名詞」形の一部 (主要部) の削除が起こっていることがわかる (削除されている部分は取り消し線で表示されている)。

- (1) The first expedition to the Antarctic was quickly followed by another two ~~expedition to the Antarctic~~. (Quirk et al. 1985: 900)
- (2) It is not a men's magazine, but a women's ~~magazine~~.

主要部削除は一般的な複合語には見られない特徴である。例えば、*truck driver* のような典型的な複合語に主要部削除を適用することはできない (e.g. **He is not a bus driver, but a taxi driver.*)。したがって、「記述属格 + 名詞」形は、主要部削除という点において、句に近いふるまいを示していることになる。

続いて、前節で確認したものは別の当該表現が示す複合語としての側面を見ていきたい。その側面とは「名付け機能」である。一般に複合語には事物を名付ける機能が備わっているとされる (島村 2014)。例えば、「古本」と言えば「新品ではなく、誰かが古書店などに売った本」を

指すが、「古い本」はこのような特定の本を指す必要はなく、たとえ新品であっても古い本（例えば、昔に出版されたものだが新品の本）ということは可能であろう。前節でも確認したように、前者は複合語、後者は句である。このように複合語は名付け機能を有するのであるが、それでは「記述属格＋名詞」形はどうだろうか。*Women's hat* を例にその名付け機能の有無を見てみよう。もし、当該表現が句であるならば、「ある女性が持っている帽子」のような意味となるであろう。しかし、当該表現が表す意味は「女性用の帽子」という意味であり、そこには句が表す所有の意味は存在しない。したがって、名付け機能の観点から、「記述属格＋名詞」形は複合語であるとすることができるのである。以上、当該表現が示す句および複合語のふるまいをまとめると (3) のようになる。

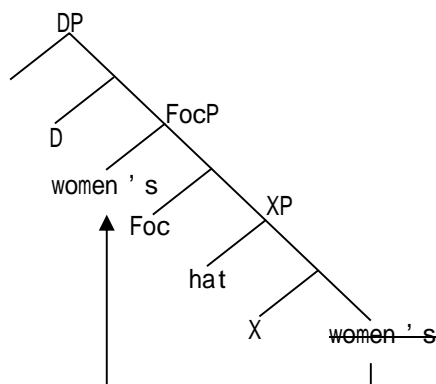
- (3) a. 句のふるまい：形容詞による主要部修飾、主要部削除
- b. 語のふるまい：別の複合語の主要部となる、名付け機能

4. 研究成果

本研究の眼目は分散形態論の枠組みに基づいて (3) の各ふるまいを説明することにある。すなわち、統語部門において許される要素および操作のみで「記述属格＋名詞」形の特性を説明するというのである。

まず、句のふるまいから説明を行っていく。当該表現は (2) におけるような環境においてその主要部を削除することができる。つまり、同形の別表現が先行文脈において存在しそれと対照される文脈において主要部削除を適用することが可能となる。このような特性を考慮に入れて、本研究では「記述属格＋名詞」形の生成には焦点投射が関与していると主張した。具体的には、Corver and van Koppen (2009) を採用し、対照焦点の特性を有する機能範疇が当該表現の形成に必要となとした。以下がその構造である（例として *women's hat* を用いる。また、下の *women's* の取り消し線は当該要素が素の位置では発音されないことを示し、矢印は当該要素が統語部門においてある位置に移動していることを示している）。

(4)



当該表現の形成においてまず行われるのは主要部・非主要部の叙述関係の構築である。それは (4) において XP と記された部分で行われる。その後、X の補部にある要素（＝非主要部）が Foc の指定部に移動することになる。(4) では非主要部 *women's* が主要部 *hat* を越えて Foc の指定部に移動している。このような非主要部の移動は当該要素が持つ素性により Foc の素性を削除する必要性から生じる（Corver and van Koppen 2009 の [Op] 素性）。この移動の結果、非主要部が構造上主要部の上部に位置することになり、「記述属格＋名詞」形の線形順序が正しく得られることとなる。

(4) のように当該表現が統語部門で形成されと考えることで、主要部が形容詞による修飾を許すという点は説明される。また、主要部削除についても、Corver and van Koppen の Foc の補部要素が削除の適用範囲であるという仮説を採用することで、説明が可能となる。(4) において非主要部は Foc の素性を照合・削除するために Foc の指定部に移動する。したがって、削除が適用される範囲には主要部のみが残っており、(2) のような音形が得られるのである。

(4) の構造は「記述属格＋名詞」形の句のふるまいのみならず語のふるまいに関しても説明を与えてくれる。(4) の Foc は対照焦点である。これが含意するところは、この構造により生成される表現と対照される別の表現（複数の場合もある）が先行文脈で存在しているということである。つまり、二つの表現がはっきりと区別されているということであり、ある集合に二つ以上の成員が存在しているということでもある。これこそが名付け機能が意味するところである。名付けとはある事物を別の事物から区別して識別するための行為であるからである。このように (4) の構造を有する表現は潜在的に名付け機能を持つことになる。これは、すなわち、(4) の構造を有する表現は複合語として取り立てられる可能性があるということでもある。分散形態論では、「統語部門は音形に一切関与しない部門であり、音形に関しては統語構造の後に位置する部門（音形部門）がその責務を果たす」という見方をとっている。したがって、ある統

語構造を有する表現が句として具現されるか語として具現されるかは音形部門の問題なのである。(4)の場合、音形部門において複合操作が適用され Foc 指定部要素と X 指定部要素が一つにまとめられることになる。その結果としてできあがった要素は複合語としてのステータスを獲得することになると考えられる。このようにしてできあがった複合要素は表現構築の材料として統語部門に再び選択される(e.g. Harley 2009)と仮定すれば、「記述属格+名詞」形が別の複合語の主要部として機能するという性質も捉えることができる。

以上のように「記述属格+名詞」形が示す語のふるまいはそれが示す句のふるまいと同様に(4)の構造から説明することが可能である。同様の構造に基づき構成される表現に「関係形容詞+名詞」形がある。関係形容詞とは、*coastal*のように名詞から派生された形容詞の一種のことである。「関係形容詞+名詞」形も、「記述属格+名詞」形と同様に、主要部削除が可能である点(e.g. John is a diplomatic historian, while Mary is a social historian.)で句のようなふるまいを示し、名付け機能を有する点(島村 2014)で複合語のようなふるまいを示す。したがって、「関係形容詞+名詞」形が示すふるまいも(4)の構造から説明することが可能である。この他に(4)の構造を用いて説明できるデータや現象を見つけていくことが目下の課題である。

<引用文献>

- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 184-221, Blaisdell, Waltham, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Corver, Norbert and Marjo van Koppen (2009) "Let's Focus on Noun Phrase Ellipsis," *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 48, 3-26.
- Embick, David and Alec Marantz (2008) "Architecture and Blocking," *Linguistic Inquiry* 39, 1-53.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Keyser, 111-176, MIT Press, Cambridge, MA.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1994) "Some Key Features of Distributed Morphology," *MITWPL* 21, 275-288.
- Harley, Heidi (2009) "Compounding in Distributed Morphology," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 129-144, Oxford University Press, Oxford.
- Marantz, Alec (1997) "No Escape from Syntax: Don't Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," *Proceedings of the 21st Penn Linguistics Colloquium*, ed. by Alexis Dimitriadis, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark and Alexander Williams, 201-225.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, England.
- 島村礼子 (2014) 『語と句と名付け機能：日英語の「形容詞+名詞」形を中心に』, 開拓社, 東京.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- Okubo, Tatsuhiro (2018) "The Interaction of Syntax with Morphology and the Lexical Integrity Principle," *Tsukuba English Studies* 37, 21-45. <査読有>
- Okubo, Tatsuhiro (2018) "Identificational Focus within Genitive Compounds and Head Deletion," *JELS* 35, 117-123. <査読有>
- Okubo, Tatsuhiro (2017) "A Distributed Morphology to a Hybrid of a Phrase and a Word," *Data Science in Collaboration*, 147-154. <査読無>
- Okubo, Tatsuhiro (2017) "On the Dual Nature of English Genitive Compounds," *Tsukuba English Studies* 36, 73-95. <査読有>

[学会発表](計8件)

- Okubo, Tatsuhiro (2018) "On the Morphological Status of Complex Names in English and Japanese," 41st Annual Conference of the German Linguistic Society (Bremen, Germany) 2019 March.
- Okubo, Tatsuhiro (2018) "Compounding as Morphological Merger," Tsukuba Global Science Week 2018 (Tsukuba, Japan) 2018 September.

大久保龍寛 (2017) 「Linking Element から見る日英語の言語的特徴」, 日本英文学会東北支部第 72 回大会 (仙台) 2017 年 12 月 .
大久保龍寛 (2017) 「主要部削除と日英語の属格複合語」, 日本言語学会第 155 回大会 (京都) 2017 年 11 月 .
大久保龍寛 (2017) 「属格複合語内に見られる識別焦点と主要部削除」, 英語学会第 35 回大会 (仙台) 2017 年 11 月 .
Okubo, Tatsuhiro (2017) “On the Relationship between Relational Adjectives and a Focus Projection,” Linguistics Beyond and Within 2017: International Linguistics Conference in Lublin (Lublin, Poland) 2017 October.
Okubo, Tatsuhiro (2017) “Which Sounds Tastier, *X and Y* or *X 'n' Y*?,” Tsukuba Global Science Week 2017 (Tsukuba, Japan) 2017 September.
Okubo, Tatsuhiro (2017) “Linking Elements and the Interaction of Syntax with Morphology,” Tsukuba Morphology Meeting 2017 (Tsukuba, Japan) 2017 June.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

研究代表者氏名：大久保龍寛
ローマ字氏名：Okubo Tatsuhiro
所属研究機関名：茨城県立医療大学
部局名：保健医療学部人間科学センター
職名：嘱託助手
研究者番号 (8 桁) : 80781377

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。